

〔書簡〕

■(大正9年)八月七日

牛込富久町 青木幸太郎宛

東京田端西台通り六三二・六三三・六三四番地

海国少年社 振替東京二八二五六番

海野 厚一

前略、過日は失礼いたしました。

別封で私共の雑誌を一部差上げました。これは、いつぞや夜分お伺ひした時に、壁にかゝつてゐた、白い覆ひのかゝつてゐた学帽から、多分小学校へお通ひの小さな弟さんがおありになる事を思ひ出して、その小さい方に差上げたうございます。まだくほんのつまらないもので差上げるのもお恥しい次第ではありますが、絵だけでもごらん下さればうれしく存じます。其後吟社へお出になりなりましたか、私はあれきり伺いませぬ。東京も暑くて閉口ですから近々又国へ行つて来やうかと思つてをります。先は右まで 勿々

■(大正10年)

青木幸太郎宛

(大本教社殿の写真ハガキ)

丹波にて 長頸子

賀正

先夜はお目にかゝりながら妙に他人行儀にお別れ申しものたりな

く存じ候 今年の元日は思ひがけず丹波の宿にて迎へ申候  
元朝

■(大正11年)

静岡市鷹匠町3丁目

海野 春樹宛

目黒 兄

Savonara

My dear Haru - chan  
Kin - niisanga kaette  
ureshii daro. Shiken - yasumi  
ni nattara hayaku Tokyoe  
Oideyo. Hitoride kishani  
notte korarerukai ?

昨日の日曜日に静岡の草餅や白酒をうんとたべて、みんなお腹がふくれたところ。このひよろくの兵隊さんは一たいだれだろうね。

(印画紙のハガキ)

■大正十三年一月二日夜

東京目黒にて 兄

三千代殿

新年お目出度う 神戸の新春はどうだったか、初めて自分達の家庭を持ってしかも初めての土地で迎へたお正月は定めし去年までとは違った趣だったと思ふ。こちらは事もなく極めておだやかなお正月だった。父上と亮之助と三人、昨日の元日は、前日油断して餅を買いそくね、依つて今年はお雑煮ぬき、蛤のお吸もので屠蘇を祝つた。それに昨日は静かな暖かない、元日だった、午後から小田島樹人が

年始にやって来て話して行った、そして暮の目黒の競馬で佐々木摩山水と二人で馬券を買って百四十円づつ儲かったと元氣だった、その摩山水は嫁さんを貰ひに九州佐賀へ暮から旅行してゐるなどと話して行った、今年は何となく、年らしい氣がする即ち、元日から儲かった話、結婚の話、何れも人事ながら聞いて愉快だ、(中略)

暮といへば暮の二十三日に珍らしく帝国ホテルの演芸場へ出掛けて見た、例の「露地の細路」を藤蔭会の藤間静枝が振付けしたといふので切符を送られたからだ。ゆつくり出かけたんで、肝腎な露地の細路は終りの方を一寸しか見なかつたが、くだらないものだった、由来私は童謡は聴衆の前で公然唱つたり振など付けるものでないといふ考へなんだが、案の定だったので不愉快と同時に愉快だった、然し静枝の踊りは巧いものだった。その帰りに新橋駅から電車にのつたが、あの辺のさびれやうはなかつた、当時は当時だけに一寸身のけもよだつといふ氣がした、そして電車ののりこみが狂氣の沙汰だ、しかもその中にやはり美服をまとひ脂粉の顔をさらした女たちも交るのだから、物すさまじい。この状態が四五年続いたら東京の女達は狼になるだらう。

暮に、そちらから上京した水巴先生に逢つた、先生夫妻は十一月から大阪府下豊中村といふ処に住んでゐる、従つて曲水は大阪から出てゐる、一般の書店へも出るさうだから、序があつたら本屋で見えてくれ、新年号以来何かか、書いてゐるから。先生の話で、大阪辺も郊外の生活は随分いゝらしい、そのうちに一度そちらへも行つて見たいと思つてゐる、大阪には曲水社があるし神戸には曲水支社がある。二三日前萩間から名物芋きりぼしを澤山送つてくださった大変においしくて盛んに昨日から賞味してゐる。

今年は初ちゃんも女学校を出るし、春樹も多分中学へ入るだらう、

おひく／＼にみんなが大きくなる。私もいよく自信がついた、今年には文壇へ打つて出られやうと思ふ、そして今年の暮にはもう少しどうかいふ家へ越して、鬼が笑ふかもしれないが来年の春はもっと愉しくもつとめでたい年を迎へやうか——と考へる。今年のはじめの手紙、それを雑然とお前へ宛て、書いた鈴木氏へよろしく

■(大正13年)三月十七日夜

神戸市外西灘村鍛冶屋字岸地三十四ノ二

鈴木三千代宛(平安無事)

二人とも御達者の由、それが何より、一昨日から、独りぼつちになつてゐる、亮之助が大葉さんの令息の受験について静岡へ行つたからだ、まだ二三日は帰るまい。その代り静岡の家はここ数日一寸賑かだらうと思ふ。

お父さんは伊豆でお変りもない。ただ右の腕が時々痛んでいけなかつたさうだが、それも法蔵寺の和尚さんから、何か塗薬を送つてくれて、それで軽快された由、(中略)伊豆もこの頃寒いさうだ、東京も今月に入つてからまた冴返つてなかく／＼の寒さだ、だから二十日まではお帰りがあるまい。

たつた一人ぼつちといふのはのんきでいゝ。由来私は孤独といふ事が人一倍好ましいのだが、しかし横着者だから、あんまり長くなると困る、そこらがちらかるし汚れてしまふ。しかし一生に一度は、ほんとに誰にも離れてたつた一人ぼつちといふ生活も半年ばかりはやつてみたいと思ふ。

昨夜は小田島が遊びに来てくれた。六時頃から来て十二時半まで

ゐた、途中でしゃべりくたびれて腹が減ってしまつて、おでんやへ行つておでんと茶飯を食つた、二人で食つて五十五銭安いんでおどろいた、それから帰つて来てまたしゃべつた。小田島にかぎらず近頃はまた誘ひだされて俳句の友人達によく会ふ。どんな友人の間にあるより、やつぱり昔からの俳句の友人の中にまぢる事が一番安らかで楽しい、みんな子供に還つたやうに大笑ひばかりして、終電車までは何処にゐても別れやうとしない。

この間大阪の假寓にゐる水巴先生から、悲痛な手紙をつづけて二本いただいた、明日あたりまたいただくかもしれない。そんな手紙を見るとすぐにそちらへ飛んで行つて先生に逢ひたくなつていけない。欣也も元氣よし、大久保もお変りなし、大久保からは伊東のお父さんの処へ大変に親切な手紙をやつて下さつたさうだ、どうも大久保からあんまり世話にばかりなつて大いに恐縮してゐる、が、また、そのうちには、親切のお返しの出来る事もあらうと、それを待つてゐる。

初代も今年は学校を卒へる、この間お母さんのハガキにはミシンとかをやらせたいといふやうな事があつた、それもよからう、まだ十八なんだから結婚なんてここ四五年は要はない、(中略)

こんな事を書いたらきりがないから、これでやめる、何だかひどく乱暴な変な手紙になつた、あしからず

鈴木氏にもどうぞよろしく

## 目黒にて 兄

## ■(大正13年)八月二十四日投函 鈴木三千代宛

度々のお便りうれしく読んでゐます。鈴木氏はじめお変りもない御様子何よりです(中略)そちらも久し振に慈雨があつた由、こちらも昨日一日は烈風今日はおしるしほどの雨、これで少し涼しくなるかと思ふとまた明日あたりからは九十度にのぼる暑さに返るとか、暑さは何にしても閉口です。

さて度々お案じ下さる身体の具合、非常によろしいと申したいが実は其だ少しづつよろしい。どうせ長いのは覚悟してゐるのだから驚きません、何時癒るともなく治つてゐるといふのが由来島本の治療法のだからこれが寧ろ順調ではないかと思ひます(中略)薄紙をはがすやう、この言葉があてはまるやうです。そんな具合ですから、長いにも長いでせうが、案じないで下さい、やがて涼風がたち、もう少し腹に力が出来たら少しづつ運動をはじめ、うんと御飯をたべ、冬が来るまでにはうんとよくするつもりでゐます(中略)この頃妙にフライ、カツレツの俗人の食ひ物が食へなくなつてフライパンを一つ買いました、どうせ買ふなら目黒あたりのチャチなのよりしつかりしたのを慾しいと思つて、金五円亮之助に持たせて市内から買つて来させました。処が買つて来たのを見ると、大きさは手頃ながら、いやにベカベカで畳の上へ置くと手の方の重みでひっくりかえる心細さに、値段を聞くと金二十九銭。資生堂のアイスクリームより一銭安いには少々あきました、これなら目黒の金物屋を探した方がはるかに上等があつた筈です。然し日本橋の大きな店で買ったといふので、まさか使へないものもあるまいとあきらめて、以来それを使用して、豚をあげ鮭をあげ馬鈴薯をあげ甘藷をあげてこの数日

油責めでした、(中略)早く牡蠣のうまい頃になればいいがとしきりに待ちます。

ビクターか何かの新しいのをお求めの由羨望の至りです、こいつが東京うちだと大いに借用に行くのだが神戸ぢや残念千万です、尤もここでもこの頃頻りに近所の蓄音機がきこへます、どこの家でやるのかまだ知らないがよほど手近い処らしく、ことにそれが二軒ぐらゐで持廻りでやるらしく、ある晩は西に聞こえある晩は東に聞こえといふ状態で、レコードは五枚ぐらゐしかなく、曰く枯れすぎ、曰くカツボレ、曰く木遣と長唄の合の子みたいなもの、曰く箱根の山は天下の嶮。……といったもので、同じものを幾度となく繰返すし、何時やらうと、やる家が変わらうと、勇ましく聞えて来るのは、枯れすぎでありカツボレであるのだから助かりっこはない。久しくなやまされた裏の娘さんのチクゼンピワ節の夜毎の弾奏がこの頃幸ひに中止になったら、相変つて枯れすぎといふ大敵が現われたわけです、殊にあさましいときへ感ずるのは、真夏白昼午前十時といふ刻限に憶面もなくやりだすカツボレです。誰であつたかこの頃新聞に、近所に持ちたくないものは、ピアノの先生の家、子供が朝から晩まで太鼓をたたく家、俗悪なチクオンキを始終やる家……といふやうな事を言つてゐたが、俗なレコードには誰しも悩まされるものと見えます、神戸の家でも御近所から苦情が出ないよう、またビクターのメシンが泣くやうなレコードは一切かけないやう御注意なさるべし。いいレコードを少しやることは人助けであり劣等なレコードを繰返し／＼する事は精神的人殺しであります。おと、しの前の年の夏の宵のこと、よく覚えてゐます。あの夏の事は、い、につけ悪いにつけかなりはつきり覚えてゐます。いろ／＼な理由からあんなに苦しみもだえた事はなかつたから。カルーソー

の太々しいソロを聞きながらも、ペーターベンの何番かのシンホニーに耳を傾けながらも絶えず私の頭の中にはさまざま／＼な考えが乱れ打つて動いてみました。あの夏こそ真底から笑ひを失つてゐました、それが、今はもう、何もかもケロリとあきらめて、ハハと微笑に代へ得られます。人間全く勝手なものです。

地震の一週年が近づいてきました。(中略)それ去年の地震を思ふ事は、どういふものか一種のい、なつかしさがありません、これは、自分が家もつぶれず火事にも会はず近親の誰一人に生死の不幸も起らず、要するに地震にはうんと揺られながら比較的傍観的位置にゐられたからだらうと思ひますし、また地震にあれほどの長い間の不安苦痛をなめさせられてゐながら、先方が全く自然といふものであつて、そこに少しも人為的のものがなかつたから、あれほどおどろかされ不便をしのばされ心配させられてもそこに少しの怒りも不快も感じなかつたゆゑかもしれませぬ。(中略)十三日に横浜へ伯母一族の安否をさがしに出かけた事も忘れがたいなつかしさです、ワイシャツにズボン、ゲートル、草鞋、握飯に水筒を持って竹杖をついて品川からトロッコの上のせられて行つて見た横浜はその数日前見た東京の焼跡よりも惨憺としたものでした、その中を知らない町の焼跡に働く三人五人の人に探ね／＼して、それでも運よく濠割の舟の中に救はれてゐた伯母をさがしあてた時は、さすがに罹災者の佻しさ惨めさを味はされました、がその夜またトロッコ列車で品川へつき、明るい電燈の光や、どことなく生き／＼としてゐる人の動きを見た時には、直に、震火の禍をまぬかれた地点に住む幸福に雀躍してゐました、人間の心は全くさまざま／＼です。あの落着を失つた不安な生活気分をさへ、一年過ぎた今は、寧ろなつかしいもの追想しつゝ、その事に享樂をさへ見出す私のやうな人間さへあります。



だから、いまにあの頃の氣候になつたら一層思ひ出が深まり、私の心持は楽しむ事だらうと思ひます(中略)今夜は秋の夜らしくはれて涼しい、その空に、三百幾年目とかに一べんの大接近を地球に対して今日の午前にして、世界の天文学者を騒がせ、もうまた少しづつ遠ざかりつゝあるさうな火星が、さりげなく火の色に冴えてゐます、この星は神戸でも見えるでせう。

もう父上のお帰りも数日の後でせう、また目黒も賑かになります。鈴木氏へも御無沙汰してゐます、どうも私は拝啓陳者流の手紙が不得手なので、存じながら御ぶさた勝ちです。あしからずおゆるし下さるやうおつたへ下さい(後略)

目黒にて 厚一

火星が地球に一番接近したといふ

八月二十日あまり三日夜

三千代殿

■(大正13年)十月十三日

鈴木宇太郎宛

海野 厚一

拝啓漸く秋晴れの折柄御健勝羨望に不堪候

さて過日は亮之助欣也宛御丁寧なる御見舞状頂戴恐入候

なほ亦 本日は御収獲になる松茸澤山に御恵送下され 今日早朝聊かの損壞もなく到着 早速 朝食より一同香り高きを賞味いたし候 為めに今朝は父の食事 軽きながら一腕殖え候等 重ねくの喜びにて御芳志厚く御礼申上候

父事 今回は 一時は衰弱甚だしく心痛いたし候へどお陰様にて

この頃はおひくゝに力づき 最早心配なる域は経過致し候様に見へ候へば何卒御安緒願度 なほ一兩日中には専門に看護する者も参る筈に候へば自然人手も殖え看護にも手が廻るわけに候 小生はまた 今回の臥床は脱肛など、いふどうでもよき臨時の出来事にて その辭数日間はなかゝの苦痛を味ひ候 然し幸ひにこれも自然治癒に近づき一兩日中には平常と変りなきやうに相成べくと存じ候へばこれ亦御放神願上候 本日など湯茶が飲みたきなどの用は自身動きて便じをり候

さて最後に一寸御伺ひ申度事有之候 いつぞや三千代より、外国より毛布をお買求めなされ候様仄聞いたし候様覚え候が都合よろしくば一つ御手数数お願ひ申さんかとも存をり候ま、御手数ながら御序の節左の様の事御教示願度候(中略) 実はこの冬の父の爲めに一つ用意いたさんかと愚考いたし候ま、勝手なお願ながら右御伺申上候 三千代よりも心にかくれ候て 度々見舞状貰ひ候へども最早決して心配は無用と存候へば 決して気にせぬやうよく御きかせ願上候 少々疲れ候へば書放しにて読返しいたさず候 御判読乞上候 先は御礼芳々御伺ひまで 勿々不備

十月十三日夕刻

宇太郎様

厚一

且今大久保叔母及び欣也参りをり父上は梨を食べながら 元氣よく談笑いたしをり候

■(大正13年11月1日)

鈴木三千代宛

無事帰神の事と思ひます。

通夜の疲れや気疲れや定めし今頃はがっかりしてゐる事でせう。身体に多少変調を来してゐるらしい様子だったから何か後で障りはしませんでしたか。私はまだ大事をとつて寝てゐますが、相変わらず食欲もあり順調によくなりつつあります。案じる事無用。今まで日夜絶えず顔を合してゐてその人の事ばかり案じてゐた父上が居なくなつたので頭が余り軽くなり寧ろ退屈で困ります、然しまだ淋しいとか悲しいとかいふ心持は少しも湧きません。これはもつと後になつてからでせう。

さて別封で私の大島羽織袴と下着襦袢とを送りました。もし手すきならば一つ洗ひ張にやつて作りなほして下さい、消毒所から消毒がすんで来たばかりですから汚れてゐても絶対に安全です。下着は実はお父さんのですから寸法が合ひません。無理な仕事かも知れませんが何とか工風して下さい。襦袢の襟は色合が如何にも貧弱です、もつと黒っぽい色を買つてつけてくれませんか。今まで下着を着たりなどすると、羽織の袖が少し短かいやうで着物の方が出るやうでしたその辺も御一考下さい。為替券一枚封入しました洗張代などです。足りなかつたら遠慮なく知らせして下さい(中略)先日は大久保から滋養があるからとチーズを一箱貰ひました、滋養になるといふのでうまいのかまづいのか解らない奴を臭いのを我慢して毎日パンへつけて食べてゐます。

十一月一日夜

目黒 厚 一

三千代殿